

石川県立美術館だより

平成13年9月1日発行 第215号

花と装飾 ナンシー派展



オタマジャクシ文花器のための下絵
ガレ工房 ナンシー派美術館蔵



オタマジャクシ文花器 エミール・ガレ ナンシー派美術館蔵

第18回 全国都市緑化いしかわフェア 協賛

9月1日(土)~24日(月・振休)会期中無休

目次

花と装飾 ナンシー派展.....	2
作庭記の世界	3
前田家 名物製の精華.....	4
美術館小史・余話(14)	4
常設展示室 主な展示作品.....	5

展覧会回顧(坂寛二・坂坦道の世界)	6
貸出中の所蔵品、各地の展覧会他	6
企画展TOPIC、九月の行事案内他	7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ 通信	8

企画展示室(第7~9展示室)

花と装飾 **ナンシー派展**

9月1日(土)~24日(月・振休)会期中無休

主催 / 石川県立美術館・朝日新聞社・ナンシー市

後援 / 金沢市

協賛 / DNP 大日本印刷

協力 / 日本航空



卓上ランプ“ホテイアオイ”
エミール・ガレ ナンシー派美術館蔵

観覧料(常設展示室を含む)

個 人	一般	1,000円
	大学生	600円
	高中小生	300円
団体(20名以上)	一般	800円
	大学生	400円
	高中小生	200円

当館友の会員は受付での会員証提示により、団体料金で観覧になれます。

十九世紀末から二十世紀初めにかけて、ヨーロッパを席卷した芸術様式を「アール・ヌーヴォー」といいます。植物に着想を得た独特の曲線からなる、この魅力的な装飾様式は、フランスではパリと並んでナンシー市がこの運動の中心となっていました。そのため、一八九〇年頃からこの地で活躍を始めた、エミール・ガレを中心とする芸術家たちは「ナンシー派」と呼ばれています。

フランス東部、ドイツ国境に接したロレーヌ地方の中心都市ナンシーは、ロレーヌ公が居城を構えた中世以来の、長い文化的伝統を誇る都市で、また金沢市の姉妹都市でもあります。ここにはもともと十五世紀以来ガラス工芸の伝統がありましたが、十九世紀には製鉄や鉱業といった産業が起り、普仏戦争の後にはロレーヌ地方の中心都市として急速に発展しました。こうして豊かになった人々と、生活自体を芸術化してしまおうというアール・ヌーヴォー運動が呼応して、ナンシー派が生まれたと言えるでしょう。

ナンシーのアール・ヌーヴォーは、ヨーロッパ中のどこよりも、モティーフとしての植物へのこだわりが感じられます。市民の間では園芸熱が高まっており、自然観照に基づく東洋美術(特に日本美術)に対する関心も早くから行きわたっていました。芸術家たちも作品に花や樹木の形態を積極的に取り入れて、生活を豊かに飾ることを目指しました。その試みは、自然との共生が求められる現代の私たちにとっても示唆に富んでいます。

ナンシー市では、一九九九年を「ナンシー派年」とし、その業績を回顧する三つの展覧会を開催して世界的な反響を呼びました。本展はこの三点のエッセンスを集めて、日本向けに特別に再構成するものです。ガレをはじめドーム、ルイ・マジヨレル、ウジエーヌ・ヴァランらのガラス工芸、家具、デザイン案など、約百四十点のほか、当時の雰囲気伝える美しい写真などを加え、ナンシーに花開いた総合芸術の全容を立体的に展示するものです。



装幀『貧者の独り言』(ジュアン・リクテウス著)
テオフィル・スタンレン ナンシー、ロレーヌ歴史博物館蔵



花器“フルコー” 1904年
エミール・ガレ
ナンシー派美術館蔵



アジサイ文衝立 エミール・アンドレ
個人蔵



アジサイ図 1904年 アンリ・ベルジェ
ナンシー市立美術館蔵



藻魚文脚付杯 ドーム
ナンシー市立美術館蔵

常設展示室(第2展示室)

特別陳列

作庭記の世界

9月1日(土)~24日(月・振休)



重要文化財 作庭記 鎌倉12~13世紀

『作庭記』は、寝殿造系庭園を構築する際の指針を記した秘伝書であり、伏見修理大夫であった橋俊綱(一〇二八~九四)の著作と考えられています。今回公開される重要文化財は、上下二巻から成っており、奥書から正應二年(一二八九)以前の成立であることが知られることから、現存する最古の書写本で、もと前田家に伝来しました。内容は大体以下のとおりです。

- 一 作庭の基本理念
 - 二 建築と庭園の望ましい関係
 - 三 石を立てる様式
 - 四 池の形態について
 - 五 島の形態の分類
 - 六 滝を立てる方法
 - 七 滝の落下形態の分類
 - 八 遣水について
 - 九 立石についての口伝
 - 十 禁忌事項
 - 十一 四神相応に即した植樹の方法
 - 十二 泉について
 - 十三 雑部(楼閣について)
- 以上 下巻
- この中で是非注目したいのは、冒頭の基本理念です。原文には、「石をたてん事まつ大旨をこころうへき也」
- 一 地形により池のすかたにしたかひてよれくる所々に風情をめぐらして生得の山水をおもはへてその所々はこそありしかと思ひよせたつべき也
 - 一 むかしの上手のたてをきたるありさまをあとして、家主の意趣を心にかけて我風情をめぐらしてしてたつべき也
 - 一 国々の名所をおもひめぐらして、おもしるき所々わがものになして、おほすがたを、そのところになすらへて、や八らげたつべき也」と記されています。
- すなわち、石を立てるには以下の三つの眼目を心得るべきであるとして、最初に、地形や池の形態を踏ま

えた制作方針に、実際の自然風景の風情を思い合わせる。次に、昔の名人の作風を規範とし、依頼主の意向を斟酌しながら自分の美意識を發揮すること。そして最後に、国々の名所の見所を、自分の制作方針に反映させて、大体の風情を、平易にその名所になぞらえることを主張しています。

ここで強調されているのは、「模倣の美学」です。まず、最初に自然の模倣が述べられていることは、洋の東西を問わず、自然の模倣を第一義として芸術の発生を位置付けていることを、作庭という行為においても再確認できる点が特筆されます。続いて先行する名作の模倣が説かれますが、これは日本の伝統的な「型」の思想につながるものとして興味深いものがあります。そして最後に名所の模倣ですが、この文脈は「見立て」と解釈すべきでしょう。

このように、『作庭記』は日本の伝統的な美学の理念を、作庭という具体的な行為に即して体系的に論述した「美学書」と位置付けることができます。そしてここに挙げたように、模倣にしても、単純に写すような模倣を推奨しているのではなく、あくまでこうした要点を自己の美意識や制作方針に習合させるといって、制作者の主体性を尊重する姿勢が打ち出されていることも再認識する価値があります。

なお今回は、『作庭記』の公開にあわせて、重要文化財の秋月等観筆「西湖図」と、狩野元信の筆と伝えられる「山水図」も展示します。西湖は、日本の庭園において現実の中国の景色を取り込む際に、一般的な規範となったものですし、元信の「山水図」は仔細に観察すれば名所図としての「瀟湘八景図」をやつしたものであることがわかります。それゆえ『作庭記』が規範とした、池、島、滝などの山水の諸要素について、これらの作品からの連想をとおして、視覚的な手がかりを得ることができます。(村瀬博春 学芸主管)



山水図 室町16世紀 伝狩野元信



重要文化財 西湖図 弘治9年(1496) 秋月等観

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

前田家 名物裂の精華

9月1日(土)~24日(月・振休)

名物裂とは、そのほとんどが中国の宋・元・明・清の時代に製織されたもので、鎌倉・室町時代から江戸時代中期にかけて日本に舶載され、わが国の茶道をはじめ近世文化の成立に重要な貢献をした裂地類の固有名称です。内容は金襴、緞子、間道が主で、錦、風通、縹珍、ピロード、印金、モール、更紗などがあります。このような舶載裂は書画の表装裂や、名物茶道具の仕覆として、当時の優れた鑑識眼を持つ茶人たちによって選択されたものです。

前田家の名物裂コレクションは、三代藩主利常の収集によるものです。寛永十四年(一六三六)、当時唯一の海外への窓口であった長崎へ家臣を遣わし、価がまわず買い求めさせたといわれています。

利常は茶の湯にことのほか関心を寄せ、小堀遠州との交流も深く、茶器の購入を相談したり、点前や道具について遠州に教示を受けている事が、今日に伝わる文書からうかがい知ることができます。

それゆえ、利常収集の名物裂にも、当然遠州との関連は多大なものがあったと思われる。遠州は名物裂帖「文龍」を作成しています。遠州自身が名物茶道具に用いた「好み裂」の裁ち残りを、そのまま見本として保存したものがほとんどですから、いわゆる裂類を比較対照するための見本帳です。またこれが、後に名物裂の名を生じさせた根本資料といえるものであり、さらには遠州によって確立された「好み裂」の美の基準は、遠州ゆかりの茶道具が「中興名物」としての美の一典型を確立しているように、後の時代の名物裂の基準となっているのです。

今回は、金襴、緞子、錦、風通、間道、モールなど三十三点を展示しますが、利常と遠州という二人の茶人によって生まれたといっても過言ではない、洗練された美の世界をご堪能下さい。

(高嶋清栄 学芸専門員)

美術館小史・余話

14

先号(13)で述べたように、美術館へ美術品を寄託するということは、言うは易くして実現はなかなか困難であったが、故山川庄太郎氏のコレクションの寄託が一つの切っ掛けとなって、明るい兆しが見えてきた。現在一括寄託を受けている大乘寺の文化財がそれである。

今は亡き日本画家で郷土史家でもあった山科杏亭さんが、昭和三十八年十二月の中頃に美術館へやってこられ、「大乘寺の文化財の保存管理がうまくいっていないので、美術館で預かってはどうか?」という申し入れを受けたのである。大乘寺の文化財については、重要文化財が四件(その後一件追加され現在五件)含まれた曹洞宗門の貴重な一大コレクションであり、果たして美術館へ移すことが妥当であるかどうか、正直云って多少気になったのである。そこでとりあえず、年が明けて一月に入ってから現状を視察しようということになった。

確か一月十日頃であったと思う。その頃の大乗寺は、今のように整備が全くされておらず、松本龍潭老師が唯一人寺を守っておられた。正月三日を過ぎて降り積もった雪をかき分けるようにしてお訪ねすると、老師は障子を開けて、「あの宝蔵を見て下さい。」と云われた。土蔵の土壁は剥がれ落ち、入り口の扉の立て付けも悪く、鍵も十分でなかった。老師が自分の代で何かあってはと決断された思いが十分に伝わってきた。それから移管のための収蔵品の調査、簡単な目録の作成等を行って、文化財一括を美術館の収蔵庫へ移したのである。

県と大乘寺との正式契約が結ばれたのは、昭和四十年六月一日のことであった。このことにより、その後多くの寺社から文化財の寄託を受けることになった。



重要文化財 大乘寺仏殿



重要文化財 三代嗣法書 第1通 徹通義介嗣書

高嶋 丞 当館館長

寺社文化財の寄託第一号

常設展示室

主な展示作品

9月1日(土)~24日(月・振休)

● = 国宝 = 重要文化財 = 重要美術品
 = 石川県指定文化財

色絵亀甲菊流水図平鉢 古九谷



前田育徳会展示室

特集 前田家 名物裂の精華

小石畳地宝珠形鳳凰雲文様金襴(興福寺金襴)

花七宝入り石畳文様綴子(遠州綴子)

流水梅花文様綴子(織部綴子)

算くずしに輪宝文様風通(糸屋風通)

段文様間道(日野間道)

花唐草編文様金モール

一重蔓花唐草尽し縫絹

覆盆子裂

第1展示室

●色絵雄香炉

色絵雌雄香炉

野々村仁清
野々村仁清

第2展示室(古美術)

古九谷

青手松竹梅文平鉢

青手椿図平鉢

青手老松図平鉢

色絵亀甲菊流水図平鉢

色絵四葉座十字文平鉢

特別陳列 作庭記の世界

作庭記

西湖図

山水図

秋月等観
伝狩野元信

第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

特集 館蔵優品展

油彩画

杏花

石の花

馬に凭る(B)

リヨンの丘

印度の女

裸女達に捧ぐ

花咲く砂丘

催眠術(馬)

金山平三

鴨居 玲

高光一也

田辺栄次郎

南 政善

宮本三郎

森本仁平

吉田富士夫

彫塑・造形

若日の影

人魚

山羊を飼う老人

矩 幸成

松田尚之

吉田三郎

第5展示室(工芸)

特集 館蔵優品展

陶芸

燿彩鉢「極光」

釉裏金彩泰山木文飾鉢

漆工

椀胎黒漆鉢

雷鳥の図箱(作品と図案)

染色

友禅游魚模様振袖(作品と図案)

名園譜

金工

青銅露草文水盤

木竹工

櫻造食籠

川北良造

南部勝之進

木村雨山

梶山 伸

寺井直次

赤地友哉

三代徳田八十吉

吉田美統

吉田三郎

第6展示室(日本画)

特集 館蔵優品展

幻花

水辺

蓮田

白山図

梨色

蓮

静映

牡丹

梅川三省

沢野慎平

下村正一

玉井敬泉

島山錦成

浜出青松

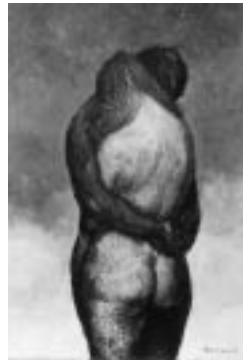
平桜和正

藤井観文

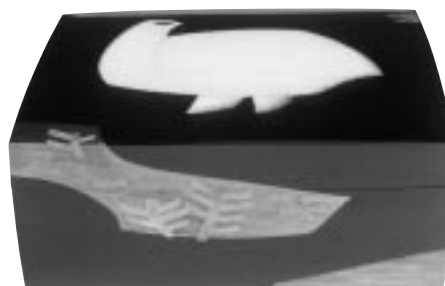
今月の常設展示は第18回全国都市緑化いしかわフェア協賛です。

観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	



石の花 鴨居 玲



白山図(左隻) 玉井敬泉



人魚 松田尚之





坂寛二・坂坦道 油絵と彫刻

能登内浦町の生んだ二人の芸術家、坂寛二・坂坦道父子を取り上げた特集展示でした。

父寛二は、石川県洋画界の先駆者として知られ、「石川洋画のあけぼの」「大正の石川美術」といった、当館で過去に開催した展覧で「尾小屋鉾山」などを取り上げてきました。今回は「自画像」や「裸婦」といった初公開の作品を含めて六点を展示しました。

一方の坦道は、「クラーク博士の像」の作者として、北海道では知られた存在でしたが、東京美術学校入学以前に北海道に転居したこともあって、石川では馴染みの薄い彫刻家でした。今回、札幌在住のご遺族から八点の作品の寄贈を受け、当館が所蔵する「酔っぱらい」を加えて初期から晩年までの作品をご覧いただきました。第七回日展（新日展）で特選に輝いた「青年像」にはじまり、ベトナム戦争当時の世相に対する思いを込めた「焦土を行く」、郷里石川への愛着の詰まった「御陣乗太鼓」など、多様な世界を多くの方に堪能していただけたのではないかと考えています。

今回の展示に際し、ご遺族ばかりでなく、石川県内の親族や知人の方からいろいろな情報をいただきました。寛二・坦道の思い出はもちろん、中には坦道の祖父諱山についての話もありました。諱山については能登を中心にいくつかの作品が知られていますが、まとめて見ることはほとんどないため、あまり知られていないのが現状です。この先調査を進め、ゆくゆくは諱山・寛二・坦道と続く三代の歩みを取り上げることができればと思っています。（谷口 出 学芸専門員）

貸出中の所蔵品

重要美術品・石川県指定文化財

祇園会図

伝長谷川久蔵筆 計一点

展覧会 長谷川等伯シリーズ 長谷川派の絵師たち

会期 八月二十五日（土）～九月二十四日（月）

会場 石川県七尾美術館

彩瓷芋版壺

石黒宗麿作 計一点

展覧会 京都の工芸 1945-2000

会期 八月二十八日（火）～十月二十一日（日）

会場 京都国立近代美術館

仰観楠寮

木戸孝允筆

日本武尊像

松井乗運作 計一点

展覧会 『兼六公園』の時代展

会期 九月八日（土）～十一月十一日（日）

会場 石川県立歴史博物館

牧歌

宮本三郎筆

マライの少女（南方従軍素描集の内）

宮本三郎筆

安南娘東京風（南方従軍素描集の内） 宮本三郎筆 計三点

展覧会 開館1周年記念特別展

「小磯良平と宮本三郎」

会期 九月二十一日（金）～十一月十一日（日）

会場 小松市立宮本三郎美術館

各地の展覧会

九月

開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

アメリカが創った英雄たち

「肖像が語るアメリカ史」アメリカン・ヒロイズム 10/14まで

国立西洋美術館（東京都台東区・〇三 三八二八 五三三）

そのりのあるかたち 澄川喜一展 9/6～9/24

東京藝術大学大学院美術館（東京都台東区・〇三 五六八五 七七五五）

縄文と岡本太郎展 10/8まで

川崎市立岡本太郎美術館（川崎市多摩区・〇四四 九〇〇 九八九八）

日本画の三人 大矢紀三・輪晃久・山崎隆夫展 9/15～10/28

新潟県立近代美術館（長岡市・〇二五八 二八 四一一）

瀧口修造の造形的実験 9/24まで

富山県立近代美術館（富山市・〇七六 四二二 七一一）

浮世絵の子もたち くもん子とモリ研究所コレクション 9/14～10/14

岐阜県美術館（岐阜市・〇五八 一七一 一三三三）

陶芸の森の歩み 世界の現代陶芸作家たちからのメッセージ 9/24まで

滋賀県立陶芸の森美術館（滋賀県信楽町・〇七四八 八三 〇九〇九）

田中信太郎 一饒舌と沈黙のカノン 9/13～10/14

国立国際美術館（吹田市・〇六 六八七六 二四八）

異国絵の冒険 ー近世日本美術に見る情報と幻想 9/15～10/21

神戸市立博物館（神戸市中央区・〇七八 三九一 〇〇三五）

第31回文化財現地見学のお知らせ

今年度の文化財現地見学は、現在次の予定で準備を進めています。見学コースや申し込み方法などの詳細は、来月の「だより」に掲載いたしますので、しばらくお待ち下さい。

日程 十月二十日（土）～二十一日（日）泊二日
見学先 京都府（舞鶴・福知山方面）
見学地 円隆寺（舞鶴市）、天寧寺（福知山市）他
申込抽選会 実施日の一週間前頃を予定。



高光一也氏（北國新聞・昭和7年10月）右
画室にて 昭和21年 左

企画展TOPIC

二つの肖像

高光一也という名前を目に、耳にするたびに、思い浮かぶ顔が二つあります。

一つは、六十九年前、昭和七年十月に高光氏が帝展に初入選し、大きく新聞報道された際の写真、この時二十五歳でした。三年前に新進気鋭の画家中村研一に師事し、初めて出品を許され初入選を果たしたこと、石川在住者における帝展洋画部の最初の入選者であること、十月限りで七年間の小学校勤務を終え、父大船をつぎ僧籍に入ることなどが記された興味深い記事です（北國新聞昭和七年十月十四日付）。

そして記事にインパクトを与えているのが、この高光氏のクラウチングスタイルの写真なのです。ギラリと眼を光らせ一文字に口を引き結んだ顔はちよつとおつかなく、しかもつっぱり青年よろしくしゃがみこんだ姿はなぜこれが晴れの初入選の掲載写真なのかと不思議に思えます。小学校の集合写真でも引き伸ばしたのでしょつか。なかなかユニークです。

もう一つは昭和二十一年に描いた「画室にて」の女性の顔。第二回日展出品作で、戦後の高光氏の出発点をなします。髪型は違うし、顔の向き

も反対ですが、額から眼窩、鼻筋、頬、口元などとてもよく似ています。戦後強くなるであろう女性、生涯の題材となるであろう女性に、自分をなぞらえた自画像といえます。この後画風はどんどん変化していきます。

西欧の新しい情報を敏感にキャッチし、作品に取り込んでいくことが、高光氏の時代の画家の宿命でした。そうした時代に地方で創作を続けるとことは、大きなハンディを背負うものでした。しかし若き高光氏はじやれたモタニズム全盛の頃には土臭い農家の人々を描いて画壇をアツと言わせ、戦後はいち早くヨーロッパに出向き新しいスタイルを獲得します。比較的穏健な光風会・日展の中にあつて、十年単位に変転する高光氏の画風は常に前線にあつて強烈な光芒を放しました。

没後十五年にあたり、今回開催します高光一也展は、代表作を一堂に会することはむろんのことですが、高光氏のコレクションや遺愛の品を合わせてご覧いただく。

九月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月 日	行 事	内 容	会 場
9/1(土)	土曜講座	作庭記の美学 (村瀬博春 学芸主査)	講義室
9/2(日)	月例映画会	幻視の画家ボツシュ 異端の北方ルネサンス(23分) 世紀末芸術 アル・ヌーヴォー 1881年7月29日の条例(23分) (前田武輝 学芸主査)	ホール
9/8(土)	土曜講座	平家物語の意匠 (前田武輝 学芸主査)	講義室
9/9(日)	CDコンサート	バッハのカウンター J.S.バッハ カンタータ第12番・第13番(約45分) (寺川和子 学芸員)	ホール
9/16(日)	月例映画会	幻視の画家ボツシュ 地獄への下降(23分) 土と炎と人と 清水卯一のわざ(30分) (寺川和子 学芸員)	ホール
9/22(土)	土曜講座	ナンシー派とアール・ヌーヴォー (寺川和子 学芸員)	講義室
9/23(日)	月例映画会	幻視の画家ボツシュ 千年王国への夢(23分) 磯井正美のわざ 蒔醬の美(40分) (村瀬博春 学芸主査)	ホール
9/29(土)	土曜講座	日本人の美意識 4 植物的世界観 (村瀬博春 学芸主査)	講義室
9/30(日)	講演会	日本人の自然観 ー近世絵画の花鳥風月をめぐるー 講師 冷泉為人氏(池坊短期大学学長)	ホール

全館休館日は九月二十五日(火)・二十七日(木)です。

次回の展覧会

企画展 花と緑の名品展 (第7) 9展示室)
九月二十八日(金)～十月二十八日(日)
特 集 花と鳥の世界 (前田育徳会展示室)
(第2展示室)
特 集 館蔵優品展 (第3) 6展示室)
九月二十九日(土)～十月二十八日(日)
以上の展覧会はすべて第18回全国都市緑化いしかわフェア協賛です。開催期間にご注意下さい。

「没後15年 高光一也展」
平成十四年一月四日(金)～一月二十七日(日)
き、高光一也という強烈な個性に迫ってみたいと考えています。ご期待下さい。(二木伸一郎 学芸主査)



(右隻)



(左隻)

四季耕作図

久隅守景 生没年不詳

重要美術品・石川県指定文化財

江戸前期 17世紀

縦155.5 横359.4 (cm)

浸種に始まり入倉に終わる、一年の稲作作業の様子を描いた「四季耕作図」です。「四季耕作図」の源流は、稲作と養蚕・機織作業を一对に描いた中国の「耕織図」にあります。我が国では平安時代より農耕を主題とした「四季絵」「月次絵」が存在しましたが、室町時代に移入された「耕織図」はそれと結び付き、「四季耕作図」として独立・展開するのです。江戸時代に入り、この画題を多く遺した絵師の一人が、久隅守景でした。

守景筆とされる「四季耕作図」屏風は、同じく本館が所蔵する重要文化財の一本をはじめ、少なくとも六本が確認されています。「旧山川家本」として知られる本屏風は、人物を唐様化させながらも、景色は和様化して描かれています。季節の流れが通常とは逆 左から右へであることも、守景独特の描写方法です。中国に源流を持つ画題が、次第に和様化される様相がうかがえます。

さて、これは美景でしょうか。残念ながら、その描写にはいくつかの矛盾点が指摘でき、制作に際し、その正確さは要求されなかったようです。しかし、「四季耕作図」は、近世を通して絵馬・漆工品・金工品などの中に描かれ、コミュニケーションの媒体として用いられた一つの「画題」だったのです。近年、「四季耕作図」に対する関心が改めて高まっています。本屏風がどのような生活空間の中で用いられ、どのようなメッセージを見る者に伝えようとしたのか、今後も興味の尽きないテーマといえましよう。

(村上回子 学芸員)

ミュージアムショップ通信

今月も「美術館小史・余話」から話題拝借です。今回は大乗寺(金沢市長坂町)でした。まさに間髪で貴重な資料が救われたわけですね。

そこで、ショップで買える大乗寺関連本はというと、むむっ「加賀大乗寺の名宝と月舟宗胡展」(平成六年刊)だけです。今のところ、これは大乗寺中興の祖、月舟禅師(一六一八-九六)の資料が中心です。寄託資料の全体像を知るには「加賀の古刹 大乗寺の名宝」(昭和六十二年刊)という本がおすすめたのですが、こっちは本は売り切れ絶版、「ごめんなさい!」どうしてもという方は、図書閲覧室で見てください。

そして第2展示室では、年に一回必ず特集展示の形で一般公開しています。今年は十一月末から。どうぞお忘れなく。



『加賀大乗寺の名宝と月舟宗胡展』
(定価1,000円)

演題 日本人の自然観
講師 近世絵画の花鳥風月をめぐる
冷泉為人氏(池坊短期大学学長)
日時 九月三十日(日)午後一時三十分
会場 当館ホール

休館日

九月二十五日(火)・二十七日(木)

石川県立美術館だより

第一一五号 平成十三年九月一日発行

千九一〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三一)七五八〇
FAX 〇七六(一三四)九五五〇